エンカウンター（ＥＮＣＯＵＮＴＥＲ）

第　２０９号

2019 年 9 月 1 日
編集・発行人　〒224-0015　横浜市都筑区牛久保西 2-14-28　山口周三
電話　080-1232－0905
http://encounter.agape.gr.jp/

小西芳之助導源『わが主イエスよ』より（９）

第 9 講（続き）死に勝つ生涯（その 2）

称名の意義、功徳、ご利益

称名のご利益というものは人間の言葉では、もうこれは説明できません。私の気付いた点、簡単に 11 を挙げてみます。

第 1 は、救いの条件を満たすことになるのですから、これは贖いの無限の恵みを自分に吸い取ることになるのですから、我々に、神の子たるの信仰、復活の望み、これがいよいよ確かになってくる。救いの条件を満たしつつあるのですから、神の子たるの信仰、復活の望みがいよいよ深くなってくる。これが第 1.

第 2 は、神の意思を行なうことですから、愛の行ないです。キリスト教で「愛」というのは、すなわち「わが主イエスよ」と言うことです。「わが主イエスよ」と称えることが、これが人間の行なう愛の絶頂です。

第 3 は、神が贖いの恵みを、無限の恵みを、称名として人類に提供されているのですから、それを真受けに受けて「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と言うことは、神に対する感謝、報恩になる。神に対して感謝し、神の御恩に報ずることになります。「わが主、イエスよ、わが主イエスよ」ということは。

第 4、これは今日の「死に打ち勝つの生涯」の中心になってくる。死に打ち勝つ力が与えられる。「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と言うことは、死に打ち勝つ力が与えられる。

戦国時代に高山右近という小さい大名の信者がおりました。これは旧教でしょうな、旧教ですから「わが主イエスよ」と言ったか、聖公会の「主よ、憐れめ」と言ったか知りませんが、「わが主イエスよ」と言ったでしょう。高山右近の兵隊は戦争で強かったそうですね。これはきっと「わが主イエスよ」「主よ憐れめ、主よ憐れめ」と言って戦争しているんですから、死を恐れていない。死を恐れていないような、こんな兵隊は強いですよ。負けない。首がちぎれてもまだ言っている、「わが主イエスよ、わが主イエスよ」。だから将軍が「攻めよ！」と、司令官から命令が来たら、バーッと鉄砲を持って向こうに行って、「わが主イエスよ、わが主イエスよ」と攻めてい

くんですから、強いですよ。私はよく分りませんけれど、豊臣秀吉も高山右近には手を焼いたのだろうと思う。要するに、死に打ち勝つ力、これは称名から来る。

第 5 に気が付くことは、これは祈りになる。「主の祈り」をイエス・キリストが教えた時に、「汝ら、かく祈れ」という時に、「御名をあがめさせたまえ」という字が初めに来ている。「わが主イエスよ、わが主イエスよ」という称名は、祈りになる。これは現世、来世に通ずる、これは祈りの親方です。大抵我々は祈りと言ったら、わがままな祈りをしています。「わが主イエスよ、わが主イエスよ」というのは、これは祈りになります。クリスチャンの祈りです。

第 6 は、万人に可能です。これは万人に可能です。誰でもできる。万人に可能。万人ができる。これが好きです。万人に可能ということ。

法然上人のお言葉に、「男女、貴賤、行住坐臥、時、所、諸縁を論ぜず、これを処するに難からず、乃至、臨終に往生を願求するに、その便りを得たりと、恵心の先徳の置き給える、誠なるかなや」と法然が言った。

第 7、世間のことは 3 次元でありますけれど、称名は第 4 次元の

消息の言葉です。

第 8 には、人相が代わってくる。称名するまでは「俺が」というような傲慢な顔をしているけれど、称名をし出してくると、穏やかな、人相が変わってきます。

第 9 には、喜び、平安がついてくる。

第 10、神の子たるの信仰、復活の望みですから、主ともにいます。主と聖霊が共にいます。

第 11、健康、長寿。これに勝るものはない。栄養の滋養分とか、あるいは妙薬、薬というのは問題にならない。健康、長寿、これが一番。私みたいなこんな弱い、半分死にかかっている人間が 80 まで生きているというのは、これは称名のおかげです。私は、そう見ていいと思う。他のことは忘れてもいい。健康、長寿のために称名しましょう。

一隅を照らす人

日本民族並びに人類の将来に対する私の感想です。伝教大師が比叡山を興すときに「一隅を照らす人をつくるために、私は比叡山をつくる」と言われた。「一隅を照らす人」。死に打ち勝つ人は、一隅を照らす人になる。一隅を照らすことができる人になる。死に打ち勝つ人、この人が日本民族の将来、人類の将来を決定する。

第 10 講　私の信仰

本日は 3 つの点において申しあげたいと思います。

第 1 は、キリスト教の信仰というものが非常に難しい、非常に困難であるということについて申しあげたい。

第 2 には、そのキリスト教信仰の内容。これはもちろん私の小さな理解であります。

第 3 番目には、この日曜に感じました出来事がありましたので、その出来事を申し上げたい。

キリスト教の信仰は、非常に難しい

第1、キリスト教の信仰というものが非常に難しいということについて申しあげます。これは、キリスト教信仰といえば決まっている。イエス・キリストの十字架の贖罪の信仰と復活の信仰です。これが非常に難しい。5年や10年で分かるものではない。一生かかって分るものです。内村鑑三は「聖霊は徐々に下る」と言った。聖霊が下ってこれが分かる。人間の生まれつきの知恵では分りません。知恵を超えている。そうですから、聖霊が徐々に下ってこれを明らかにしていただく。

その困難であるという一つの証拠を上げましたが、今日石館(守三)先生に読んで頂きましたルカ伝24章の復活の記事。ペテロ、ヨハネ、11弟子、これは、3年間イエスキリストに直接教えてもらった弟子です。3年間、朝な夕な、イエス・キリストから直接に聞いた弟子。それも「私は十字架にかかって人のために命を捨てて、3日目に復活する」ということを死ぬ前にちゃんと言ってあった。しかるに、いよいよ復活が起こって、あの婦人たちが天使に示されて復活の事実を報告した時に、彼らは信じましたか。ノー、信じなかった。愚かな話を聞いたと書いてある。いかにこの信仰が難しいか。

イエスの十字架と復活

このイエスの十字架と復活と、ここにキリスト教信仰が含まれているし、我々がこの十字架と復活によって成就したもうたイエスの贖いを信じて、我々は神の事せられて永遠の命を頂いて、天国へ帰って復活する者となるのですから。キリスト教の全部はここにあるとみて差し支えない。

その証拠に、十字架、復活と、この最後の 1 週間の記事に、マタイ伝、マルコ伝では、あの長い伝の 3 分の一を最後の 1 週間の記事で使っている。ルカ伝でも 4 分の一の長さをもって、最後の 1 週間の記事で事を書いてある。ヨハネ伝の如きは、半分、21 章のうち 10 章を使ってあの最後の記事を書いている。これがキリスト教の中心であるということは、聖書の分量から見ても解る。

しかるに、このことが難しい。弟子たちが信じないのみならず、使徒パウロ彼自身が教えたコリント教会、その教会でも、コリント第 1 の文を見たら、ごたごたやっている。信じていない。我はペテロに着く、我はパウロに着くとかごたごた言って、イエス・キリストの贖いと復活が分からない。いかにこれが難しいことであるかが分かる。我々は終生、これにへばりつく必要がある。

謙遜と忍耐をもって終生学べ

5 年や 10 年や 20 年ではいかんですよ。義務教育の最低の教育でも 9 年かかる。一つの外国語をやるのでも 10 年かかるでしょう。いわんや、永遠不滅の命を自分のものにするのに 5 年や 10 年で出来ると思ったら間違い。霊の問題です。自分が分かっていると思ったら、めくらですよ。イエスがヨハネ伝において、めくらの問答の時に「汝らは見えるというから罪が残っているんだ」と。我々は信仰があると思っているのは、信仰がない証拠です。謙遜と忍耐をもって終生、学ぶ必要がある。

信者は今既に復活しつつある者

困難であることについてはもっと言いたいのですけど、時間がない。いかに難しいかということの証拠に、内村先生の文章、復活の信仰だけ読んでおきます。

「『一日一生』9 月 17 日。

パウロのいわゆる「霊の質（かた）」とは、信者の復活体の始めであって、その核心とも称すべきものである。信者はこれを受けて既に復活体の言質を受けたのである。「霊の質」の成長発達したるもの、それが復活体である。復活体は死後において奇跡的に上より着せられるものではない。その元質は、信者が信仰状態に入りし時その時に既に与えられしものであって、死後にその完成に達するものである。かくして信者の復活は半ば未来の希望に属し、半ば既成の事実である。信者は既に復活の元質を握るものにして、同時にまた主と共にその栄光をもって顕われんことを待つものである。信者はその肉体において既に復活体の種とその核心とを持つ者である。彼は今既に復活されつつある者である。」

これが内村鑑三の復活の証言であります。

ヨエルの預言とロマ書 10 章 12，13 節

ロマ書 10 章 12 節、13 節は、これはオーガスチンも言っていない。ルッターも言っていない。キリスト教の 2000 年の歴史において、またヨエルの預言とイエスの贖いとを結びつけた説明は、私の無学なキリスト教の知識では、まだキリスト教の歴史には現れておりません。現代 20 世紀に入りましても、バルト、ドイツのアルトハウス、英国のドッド、アメリカのジョン・ウェスレー、この 4 大聖書学者、特にロマ書においてこの権威ある世界の 4 大学者が誰もまだヨエルの預言とイエスの贖いとを、ロマ書 10 章 12 節、13 節の説明には現れていません。私は外国語が弱い雨に、既に大先生が説明しているかもしれませんが、僕の知識では分りません。

Joel・Jesus・Japan

これは日本人に神は残した。ヨエル（Joel)、ジーザス（Jesus)、ジャパン（Japan)。内村鑑三は「二つの J」と言いましたけれど、私は「3 つの J」という。ヨエル、それにジーザス、ジャパン。ヨエルの預言がイエスにおいて実現されているということを世界に説明するのは、Japan。

内村鑑三は武士の子でありました。私は浄土門の信仰を持つ祖先から出た子弟、日本人がロマ書１０章１２節、１３節の深いパウロの意義を説明する日が必ず来ると思う。その日のために高円寺東教会は、石館守三、小西芳之助、小西導源と申しておりますが、この二人は少しく貢献したことを、私は日本人が知る日が必ず来ることを確信する。これは高円寺東教会第３０回のイースターとして、日本キリスト教史の一隅を照らすこととなることを私は信じます。

目の前の義務を尽くす

目の前の義務を尽くすことにつきましては、これはロマ書１２章１節、２節。この愛のこと。愛というのは、神の意思をなすことです。神の意思をなすとはどうすることかというと、われわれ現在に当てはめてみたら、自分のなしたいことをなすのではなくして、なすべきことをなす。これが神の意思をなすことになる。これはロマ書を研究したらわかる。

市川浩兄弟の証言

今度はこの前の日曜日に非常に感銘を受けたこと。これは、この前の日曜日に市川（浩）兄弟が証言した信仰。贖いの信仰と復活の信仰を証しした。私は非常に感銘を受けた。

市川君は「主と共にいます」ということは30年前から言っていた。しかし「贖いを信じている」と言っているけれど、「贖いを信じる」と言っても自分が贖いを信じているので、「主と共にいます」と言っても、自分が主と共にいますので、半分感情的、自力的なそういうにおいが私はしていた。ところがこの前の説教で「自分の信仰、自分の行ないによらない、ひとえにイエスの贖いによるのだ、その恵みによって救われて、われわれは「わが主イエスよ」と主の名を呼んで天国に迎えられる」ということを明確に証言した。今までは反自力、反他力というか、自分が半分出ていて、「主と共にいます」と言っても自分が主と共にいます、そういうにおいがしていた。ところがこの前の証言では、全く、ひとえにイエス・キリストの贖いということが移ってきている。私は驚いた。聖霊は徐々に降る。30年徐々に下って、市川は完全に聖霊を受けた。

当教会の繁盛は、1 人の人が復活贖いの信仰を取ること

当教会 30 年、当日、市川兄弟の証言がすんで石館（守三）先生に敬礼していたが、石館先生ご満足だった。それはご満足でしょう。自分が建てた教会から信者が出ているのだから。石館先生はご満足で「ああ、君たちは成長したね」と言って、市川君はえらいお褒めにあずかった。

その時にモーク先生の話になった。石館先生曰く「モーク先生は生涯、女性で体は弱い、背は小さかったけど、内には鉄を持っていたからな」と言われた。われわれの肉体は弱い、意志は弱いけれども、この復活の信仰と望みは鉄骨ですよ。石館先生の言葉で言ったら「鉄骨」だ。この鉄骨はローマの皇帝と言えども、迫害してライオン、獅子をもって信者の肉は食えたけれども、鉄骨は食えなかった。ついにローマ帝国は滅んだけれども、信仰の鉄骨は残った。パウロのロマ書は残った。

この前の日曜は 20 人ほど出席した。20 人という数は、ロマ書を読むとロマ書の最後に名前が書いてある。私は 20 人が好きですな。20 人という数字は、ロマ書の数字です。20 数人。

その時私は蓮如上人のことを思い出した。当流の繁盛というのは、大勢集まって、がやがや集まった大集会が当流の繁盛ではない。当流の繁盛とは、「一人の人が信を取ることだ」と蓮如上人は言った。よろしいか。一人の人が信を取ったら当流の繁盛です。高円寺東教会の繁盛は、1人の人が復活、贖いの信仰を取ることである。アーメン。